アテナイにおける「暴力」的政権の記憶と記録

高　橋　秀　樹

1　はじめに

筆者はこれまでギリシアのアルカイック期、すなわち紀元前8世紀から6世紀にかけての時代における、アテナイの政治文化を扱ってきた。近年の学界動向に即しつつ、この領域について、暴力および暴力についての記憶、記録というキーワードから何かを考えてみようというのが、本稿執筆の動機である。そこで注目してみようとするのが、社会ないし共同体の内に向かう暴力としての、僭主政というある種の独裁的な政治体制である。僭主政が暴力をもって市民に相対する政治体制であるという定義は、古代人自身が行っているもので、紀元前7世紀末から6世紀初頭にかけて活躍した、ソロンというアテナイの政治家が、政治詩の中で示している[1]。この僭主政という政治体制において、暴力というものが有した意味、それについての記憶や記録が、古代ギリシアの政治文化の中でどのような歴史的動態を示しているか、考えていこうとするのが、本稿の具体的な作業となる。なお、予め断っておかねばならないが、古代ギリシアでは多くの様々なポリスがそれぞれ個性的な政治体制を運営したと見られるものの、史料的な制約から、アテナイの事例を中心に考察を進めていくことにしたい。

2　暴　　力

さて、上で、古代人自身が、僭主政を暴力をもって行う政治と定義していたと述べた。そこで用いられる暴力という言葉の原語はビエー bie ないしビアー

1　ソロン詩篇第23番。

biaである。ここで既に、多神教世界であった時期の古代ギリシアが持つ特殊性に直面することになる。と言うのは、この暴力bie/biaとは、単に人間の行為を示す概念であるのみならず、多くの神々の中の一つでもあるからである。

紀元前8世紀後半から7世紀前半に活躍したと見られる詩人ヘシオドスの『神統記』によると、混沌(カオス)、大地(ガイア)、タルタロス、そしてエロスという太古の神々が現れた後、ガイアから天(ウラノス)が生まれ、ガイアとウラノスの間から大洋(オケアノス)と、テテュス女神が生まれ、そして、オケアノスとテテュス女神の間からステュクス女神が生まれ、ステュクス女神とパラスの間から栄光(ゼロス)と、勝利(ニケ)と、威力(クラトス)と、そして暴力(ビアー)が生まれたとされている。[2] そして、この威力(クラトス)と暴力(ビアー)は、常に神々の世界の長ゼウスの許にいて、その特権を保証されているが、それは、ゼウスが神々の旧世代と戦うことを宣言した際に、ゼウスに味方すべく最初に駆けつけてきたからだ、と説明されている。[3]

時代は後になるが、紀元前5世紀に活躍した悲劇詩人アイスキュロスも、そ

2　ヘシオドス『神統記』383～385行。用いた校訂本は、M. L. West, *Hesiod Theogony*, Oxford, 1966.

3　ヘシオドス『神統記』386～401行。当該箇所の廣川洋一訳は以下の通り（廣川洋一訳,『ヘシオドス　神統記』, 岩波書店, 1984年, 51～53頁）。

「ゼウスのもとを離れてこの者どもの棲家なく（ゼウスのもとを離れて）腰をおちつけることもなければ　また
外出することもないのだ　かの大神が彼らを引き具なさる時をのぞいては。
彼らはつねに　雷轟かすゼウスのもとに起居している。
というのも　このように　大洋の娘　不滅のステュクスは考え計ったからだ。
それは　オリュンポスの電光擲(う)ち放つ大神が
聳(そび)え立つオリュンポスに　すべての不死の神々を呼び集め
こう宣(の)べられた日のこと。神々のたれであれ　自分に与してティタンどもと
戦うてくれるなら　わしは（その神のもつ）いかなる特権も奪いはしないであろう
その神には　それぞれ少なくとも彼が　神々の間でもっていた特権はそのまま保持させるであろう
また　こうも言われた　これまでクロノスによって特権も権能も奪い取られた者たちには
特権と権能を回復させるであろう　それが正当なしかたであるから　と。
そこで　不滅のステュクスは　第一番にオリュンポスへとやって来られた
彼女の子供たちを引き連れて　愛(いと)しい父親の勧めに従って。
彼女を　ゼウスは褒(は)め賛え　非凡の贈物を授けられた
すなわち　彼女を　神々の大いなる誓いと定め
また　その子供たちを　常久(とこしえ)に己(おの)がもと住まわせたもうたのである。」

の作品の中でこの威力(クラトス)と暴力(ビアー)を神々として登場させ、ゼウスの命令を執行する役割を担わせている。[4]

威力(クラトス)と暴力(ビアー)のような抽象的な概念が、神々の一つとして数えられることはギリシア神話の中では珍しいことではない。その他にも、争い、憤り、苦悩、愛欲、狂気などなど、現代の我々が抽象的概念として把握するものが神格化されている例は枚挙に暇がない。そしてここで注意したいのは、これらの抽象的概念の神格化やその系譜化が、単に人間の行為や心の有様の整理・分類として考えられているわけではなさそうだということである。つまり、これらの神々は、現代の我々にとっては違和感を覚えることなのだが、少なくともアルカイック期において、個々の人間から独立して存在し、ある程度能動的に活動する主体として考えられていたようなのである。

一つ例を挙げてみよう。我々は「狂気に取りつかれた」という表現を用いることがある。これは、自分が有した、ないし行ったとは思いたくないような考えや行為があったとき、それが自分の中から生じたことを認めたくなくて、自分であれば絶対行ったり考えたりすることがありえないようなことが、自分の外に存在していたのであって、そのせいで自分が翻弄されたのだ、と扱いたい心理から生じている表現と見ることができよう。ところが、古代ギリシアのアルカイック期の場合、この手の表現が徹底しているのである。伝ホメロス作叙事詩やヘシオドス作叙事詩、そしてソロンの詩篇でも、「狂気と混ざる」とか、「狂気の中に落ち込む」とか、「狂気と遭遇する」、「狂気が人間たちのあいだについてまわる」、「狂気と格闘する」、「狂気が人をつかむ」等々と語られる。これらの表現が使われる文脈を見ていると、まさに「狂気」が独立した主体として動き回り、人間を襲う神であるかのような様子が、生々しく感じられる。[5]

このような現象は、ブルーノ・スネルが『精神の発見』という古典的名著で詳細に分析している。アルカイック期のギリシア人の観念世界では、人間の心理作用や諸行為が、一個の人格の中で統合されているものとしては把握されて

4　アイスキュロス，『縛られたプロメーテウス』，prologos．但し、暴力(ビアー)には台詞はなく、威力(クラトス)だけがヘーパイストスと対話する内容になっている。

5　拙著，『アルカイック期アテナイと党争—分析のための史料検討を中心として—』，多賀出版，2001年，特に第5章Ⅲ節「概念の内容についての先行叙事詩との関係—「狂気」の場合」，127～130頁。

はおらず、その時々に離合集散する諸々の力として感じられていたようなのである。そして、そのような力は、しばしば能動的に活動する神として理解された。[6]

そして、暴力（ビアー）もまた、そのような意味での神々として数えられるものの一つだった。このことは、アルカイック期のギリシア世界について考察する場合に、決して忘れてはならないことである。

3　ソロンと僭主政

さて、アテナイでは、紀元前7世紀末から6世紀初頭にかけて市民同士の内紛が激しく、これを収めるため、ソロンが、紀元前594年に、全権を委ねられた調停者（アイシュムネーテース）になった。彼は、独裁的な権限を用いて国制改革に取り組んだが、詩人としても才能に恵まれた人物であったので、その改革事業についての思いを幾つかの詩篇に込めて示している。

その詩篇の中で、彼は自らが行使した権限の性質を注意深く表現しようとしている。実は、彼の改革に先立つこと40年ほど前にキュロンなる人物が、独裁的な権限を握ろうとしてクーデタを起こしている。これは、アテナイ市民たちから猛烈な反発を受け、そして、他の有力者から過激な対抗措置を講じられて、失敗した。当然この失敗は独裁的権限を握ったソロンの念頭にあっただろう。また、ソロンの改革は、市民たちの紛争状態を調停する意味もあったわけであるから、どの言い分に組みしてもその反対派から非難を受け、あるいは中立であっても、まさにその故に全ての立場の人から不満をぶつけられるであろうことが十分予想できた筈である。実際、改革後、その内容に対する不平の声が各所から巻き起こり、ソロンは定めた法律を100年間（伝えによっては10年間）変えることができないものと定めるとともに、自ら法律を改変することを強制されないように、10年間アテナイを離れざるをえなかった。このような状況であれば、自ら振るった権限がいかに適正なものであるか、懸命に主張せざるをえなかったことが、十分に理解できる。

その際に、ソロンが自らの独裁的権限とはっきり峻別しようと心を砕いたの

6　B. スネル（新井靖一訳），『精神の発見』，創文社，1974年.

が、僭主政の独裁的権限であった。ソロンは次のように詠う。

「わたしが祖国の大地(ガイア)を大切にして
僭主政と生のままの暴力(ビエー)に手を染めなければ
わたしの名声を汚し貶めても
わたしは恥じることがない」[7]

また、以下のようにも詠われている。

「わたしは暴力(ビエー)によって
僭主政のようなことを〔する〕のを好まない」[8]

先にのべたように、ヘシオドスの『神統記』においては、暴力(ビエー)はゼウスの忠実な僕とされている。それを拒否するかのような文言には、一瞬戸惑いを覚えないでもない。しかし、既に仲手川良雄氏が示しているように、ここで忌避されている暴力(ビエー)とは、「生のままの、和らげられない ameilichos」暴力(ビエー)であり、神話的には、ゼウスに味方する前の暴力(ビエー)、いわば統一的秩序と足並みを揃えない暴力(ビエー)であるとも言うことができる。[9] ソロンは次のように詠っている。

「わたしは力でもって
暴力(ビエー)と正義(ディケー)を一つに結び合わせながら
これらのことをなし
約束した通りに完遂したのだ」[10]

ゼウスに服すこともなく、和らげられてもおらず、正義(ディケー)と結び合わされてもいない暴力(ビエー)が、ソロンが忌避する暴力(ビエー)なのであり、同時に僭主政が体現する暴力(ビエー)なのである。

なお、詳細は控えるが、正義(ディケー)もまた、ヘシオドス作『神統記』の中で重要な女神として登場するものであり、ソロンの詩篇においても能動的な主体である女神として描かれる場合があることを付言しておきたい。

7　ソロン詩篇23番 8 ～11行。訳は仲手川良雄訳を用いた。仲手川良雄,「ソロンのテュランニス観」,『早稲田大学教育学部学術研究（地理学・歴史学・社会科学編）』第32号，1983年。同,「ソロンの政治思想における自由」,『早稲田大学社会科学討究』LXXXVI，1984年。

8　ソロン詩篇23番19～20行。

9　仲手川良雄,『古代ギリシアにおける自由と正義―思想・心性のあり方から国制・政治の構造へ』，創文社，1998年。

10　ソロン詩篇24番15～18行。

4　ペイシストラトス家の僭主政

さて、ソロンの改革の後、政治的社会的混乱の中から、ペイシストラトスが独裁的政権を打ち立てることになる。伝承によれば、ソロンは事前にこれを予期し警戒していたとのことだが、それのみならず、アテナイ市民たちに警告を発する詩を作ってもいた。ところが、僭主政の典型的事例の一つとされるペイシストラトスの独裁的政権は、実際に出来してみると、政権樹立のための初期的措置において武力的衝突はあったものの、その政局運営のあり方について、ソロンが想定したような、和らげられない暴力(ビエー)とともに運営されるものとは言いにくいものだったようである。

アテナイ人トゥキュディデスはその政権を絶賛し[11]、アテナイ人プラトンは「クロノスの時代」、即ち至福の時代と表現し[12]、アリストテレスも人々が「クロノスの時代」と噂したことを伝えている[13]。

この政権のあり方については、伝アリストテレス作『アテナイ人の国制』が端的に表現していると言える。「ペイシストラトスは政権を握ってから僭主的というよりはむしろ合法的に国事を司った。」(傍点筆者)[14]　また、「ペイシストラトスはすでに述べたように穏和に、また僭主的というよりはむしろ合法的に国政を司った。」(傍点筆者)[15]

ここにおいて、現実の前に、僭主政は和らげられない暴力(ビエー)を伴うものであるという観念は、その拠り所を失うことになる。

また、諸伝承に見られるように、ペイシストラトスは神から政権獲得の運命を授けられて生まれ、その一家の者たちは様々な予兆から神意を推し量ることに巧みであるとともに、神の託宣を歪めた友人と絶交してしまうような敬神家でもあったようである[16]。このことは、僭主政が、ゼウスに服する暴力(ビエー)を伴う政権ではないという観念、正義(ディケー)と結びついた暴力(ビエー)による政権ではないという観

11　トュキュディデス,『歴史』(以下，トュキュディデス) VI 54.
12　プラトン,『ヒッパルコス』228B～229B.
13　伝アリストテレス,『アテナイ人の国制』XVI 7.
14　同上書，XV 3.
15　同上書，XVI 2.
16　ヘロドトス,『歴史』(以下，ヘロドトス) I 59，62～64，V 93，VI 107，VII 6.

念、つまり、神的秩序と相容れない政権だという観念を維持しにくくしたであろう。

言い換えるならば、あくまで僭主政を暴力（ビエー）という神格と結び付けて考えようとするなら、暴力（ビエー）という神についての観念そのもの、つまり暴力（ビエー）の定義そのものを変えてしまわざるを得ない状況に直面したわけであり、そして、もし、そのような長い宗教的伝統の改変が（敢えて言えば、そのような不敬虔な振舞いが）できないとしたならば、ホメロス、ヘシオドス以来の暴力（ビエー）という神格の観念によって僭主政を理解することを、もはや断念せざるをえない事態に至った、ということになったのである。振り返ってみると、ソロンがその詩篇の中で暴力（ビエー）という言葉を扱う際に、「生のままの」という形容詞を伴わせたり、正義（ディケー）と結びつけるなどと断ったりして、注意深く表現しているところが、既に、神話的構造の中で人間社会の営みを理解したり、具体的な行動の指針を得ようとしたりする手法の臨界点に達していたことを示している、と言えるのかもしれない。

5　ペイシストラトス家僭主政倒壊の記憶と記録

では、このような僭主政はどのようにして倒壊したのだろうか。更に言えば、どのようにして終焉を迎えたと人々は考えたのだろうか。

この点でアテナイ人の観念世界の中で燦然と光を放っていたであろう出来事が、「僭主殺し」の伝説、つまり、ハルモディオスとアリストゲイトンによる僭主暗殺事件である。ペイシストラトスの子であるヒッピアスとヒッパルコスの横暴に耐えかね、志ある者たちが敢然と立ち上がって僭主を倒そうとしたが、ヒッパルコスのみを暗殺したところで頓挫した、という伝承である。[17]

しかし、このような観念が単なる言説に過ぎないことは、アテナイ人自身が十分自覚していた。トゥキュディデスはハルモディオスとアリストゲイトンの行為を個人的な激情に駆られた無思慮な行為だったと批判して、[18]その実際の詳細（と彼が信じるところ）を記しているし、少なくとも暗殺事件以前の僭主政

17　ヘロドトス，V 55〜56．トゥキュディデス，VI 54〜59．伝アリストテレス，『アテナイ人の国制』XIII.

18　トュキュディデス，前掲箇所（特に VI 55，54.）。

については、それが決して横暴なものでなかったことは、プラトンが「古老たちが皆伝えていること」だと記している。[19]

ハルモディオスとアリストゲイトンの行為についての過度の賞賛は、恐らく実際にアテナイの僭主政を倒した者がだれであったかということに起因するものであろう。結局、アテナイ人は自ら直接僭主政を打倒することはなく、スパルタ軍が、つまり外国人が、アテナイを攻撃することによって僭主政を終わらせている。[20] ペイシストラトス家がアテナイから追放された後、三年間ほどの政治的混乱を経て、反ペイシストラトス家の筆頭だったアルクメオン家のクレイステネスが政権を握る。彼は、いわゆる民主政へとつながっていく改革を行うことになり、僭主の出現を防ぐための措置なども講じるわけだが、そのような反僭主政の風潮の中で、僭主を倒したのは自国の英雄ではなく、外国人だった、という記憶は、あまり具合の良いものではなかったことだろう。そこで、本当の動機や詳細はともかく、僭主の一人を殺したという事実によってアテナイの二人の人間が救国の英雄とされ、アテナイ人の記憶の中で、一つの記念碑として公式な記録となっていったのであろう。このような経緯は、当時のアテナイ人のごく自然な反応であるように思える。

しかし実は、この当たり前のことに—我々が当然だと考えるというまさにそのことに—、筆者は注目したいのである。

6　僭主政の新しい地平

ペイシストラトス家の僭主政が倒れた後、それについての記憶を記録したのは（まとまって現存する文章としては）、先ずもってヘロドトス、そしてトゥキュディデスだった。ところが、紀元前5世紀のこの二人については、豊富な伝承を残してくれてはいるものの、以前筆者が別なところで論じたように、僭主政についての定義や価値評価は必ずしも鮮明なものではない。[21] 僭主政の詳細な定義という点からすると、現存史料の中では、紀元前4世紀のアリストテレ

19　プラトン，前掲書の前掲箇所。
20　伝アリストテレス，前掲書，XIX 4～6．
21　ヘロドトスとトュキュディデスにおける僭主政観の曖昧さ、ないし価値観の揺れについては、拙著，前掲書，61～72頁。

スの『政治学』まで降らなければならなくなる。

そこでは僭主政は三つに区別されている。即ち、非ギリシア人の許で法律によって且つ世襲によって行われる僭主政があり、次いで、ギリシア人が法律によってアイシュムネーテースとして選んだ者に独裁権限を付与する僭主政がある。皮肉なことに、この定義ではソロンは僭主の一人だということになる。しかし、これら二つはむしろ王政に近いものだとされ、王政を議論する部分で扱われており、必ずしも本稿で問題としている僭主政として扱う必要のあるものではないかもしれない。[22] それに対し、僭主政の第三の類型が最も僭主政的であるとされるもので、ペイシストラトス家その他の僭主政がこれに分類されるものとされている。それは、「全く責任を問われずに自分と同様な者やより優れた者の凡てを、支配される者の利益ではなくて、自分自身の利益を目当てにして支配する独裁制」であって、「支配される者の意志に反するもの」であるとされる。[23]

かかる定義には、神格や神格化されている抽象的観念は全く関わってこない。当事者、即ち支配者と被支配者の意志のみが問題となっている。そしてその当事者の意志についても、神的・宇宙的秩序に則っている行為をしているか否かということから感じる倫理的負担も問題とされていない。あたかも人間と並んで、ないしその上に存在していたかのように考えられていた、能動的な主体としての神的諸力である暴力（ビエー）という神も、正義（ディケー）という女神も政治体制の中枢から姿を消してしまうのである。

実はこのことが、筆者が前節で述べた、注目すべき当たり前のことなのである。ペイシストラトス家の僭主政が成立する以前は、僭主政とは宇宙的神話的秩序に埋め込まれた、ある部分では人間の能力の埒外にある出来事だった。それが、ペイシストラトス家の僭主政倒壊後には、あくまでも人間の行為として成立・解体される出来事として記録されていくことになる。ハルモディオスとアリストゲイトンの伝承は、反僭主の風潮の中にあったアテナイ人の愛国心的プライドを示しているだけではない。その伝承は、個々の人間の意志によって政治的行動が執られるという観念の下に、記憶が選択・恣意的に公に記録され

22　アリストテレス，『政治学』3巻第14章。
23　アリストテレス，同上書，4巻第10章。

るようになっていく、ということの記念碑でもあるのだと思われる。

しかしこの変化が、鮮明な形で表面化するまでには、ある程度の時間が必要だった。既にヘロドトスは、僭主政という言葉を単に単独支配者を示す用語として、いわばニュートラルに用いる傾向を見せているが、猶も、僭主政に限らず人間の行為全般について、宇宙的・神的秩序ないし摂理と人間の行動の一致・不一致に倫理的価値を投影する傾向も保持している。続くトゥキュディデスにおいては、人間の行為の評価と神話的・宇宙的秩序との関連は（少なくとも表面的には）もはや見られず、僭主政という言葉で伝承されてきた出来事を、過去の国家体制の一類型として、歴史的発展の特定の段階を示すものとして考えようとする試みが認められないでもない[24]。しかし、僭主政という概念についての作品全体を通しての用語の一貫性という点では、なおも多義的で曖昧だといわざるをえない。特に断りもないまま、国家間の関係を表現するために用いられたり[25]、単独支配ではなく寡頭支配を表現するために用いられたり[26]、ノモス（法、慣習）との関係について矛盾する記述が見られたりする[27]。再びソロンのような明確な理念をもって僭主政の本質が語られるまでには—少なくとも我々に遺されている史料から知りうる限りでは—アリストテレスを待たねばならならなかったのである。

7　おわりに

—政治の脱神話化と政治的主体としての人間の台頭—

これまで述べてきたことを換言すれば、政治という領域が、当初神話に埋め込まれていた状態だったのが、ソロンの時代を臨界点とし、ペイシストラトス家の僭主政の時代を転換点として、その政権の終焉前後に、人格の意志的な営みとなっていき、そのことが自覚的に整理されていく過程がヘロドトスからアリストテレスに至る道のりだった、ということになるだろう。僭主政の観念から神格としての暴力（ビエー）が去っていくこと、この政治の脱神話化がクレイステネス

24　トュキュディデス，I 13〜18.
25　トュキュディデス，I 122，II 63.
26　同上書，III 62.
27　同上書，III 62と VI 54の記述を比較されたい。

の改革の直前に、あるいは相前後して生じていたことは、勿論偶然ではないと思われる。政治の脱神話化は、ないし、政治における暴力の脱神話化は、人間の側から言えば、市民の個々人の人格が、能動的な主体として世界に晒されたことを意味し、ある意味ではどこまでも制約を受けない自由な、しかし別な意味では拠り所なく放り出されたものとなることを意味する。そしてこのことが、個々人の見解が容赦なく激突する場で政治的意思決定が為されていく様式、即ち、古典期に実現することになる古代民主政の、基盤の一部となっていったのだと思われる。民主政の成立は、「平民」の「貴族」に対する勝利として、市民の平等な参政権をめぐる明解な政治的闘争として語られることが少なくない。しかし、そこには、政治という営みが精神史的ないし心性史的に経験したより根本的な変化が関わっており、いわゆる「合理的」精神の存在を前提としてやりとりされる権利関係だけが問題ではなかったと思われるのである。